

隨想

# 洲島行

飛田 雄一

往の航空券と三泊四日のうち往復の航空券と三泊四日のうち  
ツアーリーとして予約したのは  
一泊目と三泊目のホテル  
に朝鮮語講座の生徒らであつた。  
四年二八日より四日間、あこがれの韓国  
の漢拏山へ是非とも一度は登つてみにかつた。  
二、三年前からゴルデンウィークの時期ツアーリーをつくつて洲島へ行こうという話は出ていたが、旅行客の集中する時期で、航空券が取れないがつたりの実現しなかつた。今こそはいはう。

ただけで、あとは各自、自由行動ということであつた。四月二八日午後二時四十分の大坂→洲島直行便に乗りこんだ我々は、料内食をたべられ、飲んでみると、おつまみ放題(?)のビルをガツくと飲んでいいると、もう高度を下げ、洲島空港降りてゆく。菜の花へ油菜花と朝鮮語で言う)の黄色が目飛びこんでくる。

空港からホテルへは専用バスで約10分。ホテルは新洲島へ旧市街"旧洲島"対してこういうふうである瑞海ホテル。二、三年前にでき新しいホテルで、ソウル等よりの新婚旅行のカップルが多かつた。ホテルは荷物をおいてさっそく出かけることにする。洲島内の名所の一つである龍頭岩へタクシーで行く。火山島である洲島は石が多く、奇岩もまた多い。龍頭岩は龍の形をした岩で、旧洲島の西端の海岸にある。

(トルベルバン)

1272 しかし、ここに来てようがつたりおりてゆくと、海女たゞがまが

写真を見てイメーントしてい

るものよりかなり小さく、少々

ガッカリした。旧洲島の西端の海岸にある。

1984.5.27

これを「アシヨツ、イチヨノンへおじさん、二千ウォンで貰ひ」と売つてゐる。さうそく一皿添文する。小さめのあわび三、皿個とばまこを二匹、パケツから出しひきであわびと貝殻からはずしふつくとゆる。なまこもふぶつぶつと切り、いはして別のパケツの海水で洗つてお皿に。それをあけて出してくれる。日本円にすると六五〇円くらい。どこも一人で食べれる量ではあり。焼酎も買つてそれを飲みながら食べた。トウガラシみそのようないのをつけて食べへるのだが板麺だつた。今回の旅行の中でこれが一番おいしかつた。

龍頭岩の近くにある高級レストラン風のところに入るはやめにして、みなでプラハと旧済州市内を歩きまわり、20人も入れば満員にならぬのうな食堂に入つて韓式の夕食をとつた。こんなのは新済州をうろしてそれねた。

翌二九日と三〇日は自由行動の日だ。二九日の夜には、島の南側の西帰浦の韓式旅館をとつたり。同じ別のところを泊つてもいいとりつこと。同行の信長夫妻は、知りありの西帰浦の旅館を各々一番早くタクシードのだも出席す。

二九日を出た。私は予定として、二九日には北から三〇日には南から漢拏山へ登るつもりだ。しかし、朝から雨が降つてゐる。結局その日に参加した山根夫妻をホテルのこし、残りは島の東側をまわつて西帰浦へ行くことと、まあ世界最長の洞窟として名高り万丈窟へ行きました。西帰浦で正房瀑布を見た。天井滌布は正房瀑布もやはり、そこには天井滌布を見た。天井滌布は優雅な旅館は二人一室、エハナ五百ウォン、瑞海ホテルは五百ウォンとあります。安からました。

翌三〇日は天気も上々、いよいよ旅館はあれ。あこがれの漢拏山。



風の木屋町はさかみのうに龍頭山にあるがやかまの宿(日出峰付近)

でもらい、簡単な朝食をすませてタクシーで出発した。ハイオニグヘループは七人だった。二横断道路を通りて登山口の一つである靈室山荘に着いた。靈室案内所で一人四百ウォンの入山料と私の登山券を貰ませた。案内所の警官の話では、現在登山できるコースは靈室コースと街衆生コースだけだという。おそらく毎年は雪が多くて登山道の整備がまだやんていないのである。当初、観音寺コースを有りる予定だったが、しかるべき御衆生コースを有りることになった。

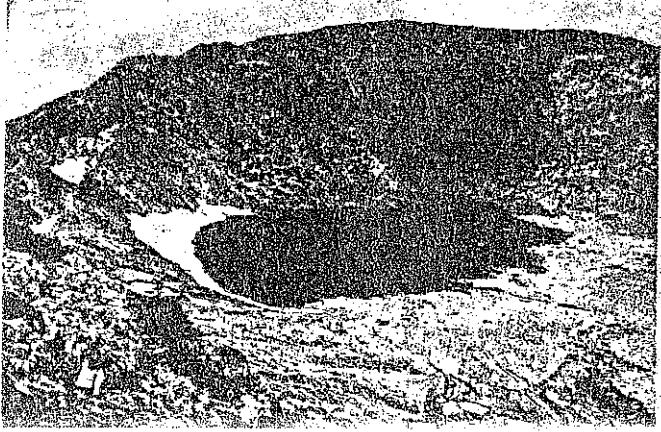
靈室はすでに海拔一二八〇mの地帯。一九五〇mの漢拿山山頂まで残りわずか六七〇m。帰りも御衆生コースなら六・一km。「六甲山のみだ・軽い！」などといふことになり、花をみて走ったり、木をみて走ったり、写真をとったり、やつくりと登つていった。靈室コースは、川もきれいし、花も多く、変化に富んだすばらしくコースだ。

ゆっくり登りすぎたために、山頂に着

けなかつた。一六〇〇mぐらゐの雪田の近くで昼食をとることにした。今年は寒さのせいで雪が多い残っている。あらこちに雪が残つているのは楽しいが、例年なら今ごろ山中がチ

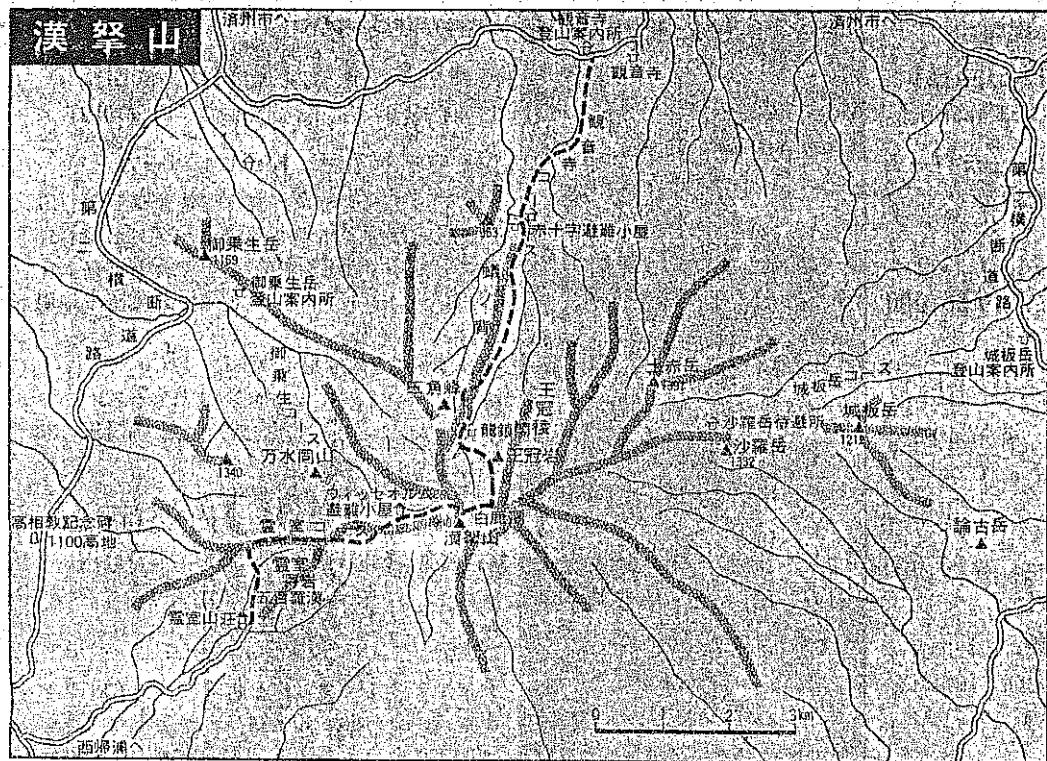
日本山の山名は「ほんじん」ぢやないかとほんどの「スゴハ」と思ふ。今まで「アシニヨンヒ・ネリヨガシブシヨツ」といふ言葉が韓国ハイキングのきまり文句かなと思つたりした。

昼食後はピッチをあげて頂上に向つた。頂下の30分は急坂だ。壁直近にような鎌場もあり、鎌場がネックとなつてなかなか登れない。



漢拿山山頂の火口の中にある湖、白鹿潭(ペンケタン)

1984.5.27



( 岩山と溪谷山 1981年11月号より )

二時頃12になつてやつと境内に着いた。山頂の三  
一部12雪をかぶりきれひだつた。  
御来生コース下りは早めピッチで御来生コースをみりた。  
一夜下りは火口の中12白鹿潭があつた。白鹿潭は、  
安たい。しかし、バス停の支社がどこにもない。不出  
あがるとなつたが、しばらく乗ったので乗りこんだ。あと  
で聞くところ止まつてしまふと、手も  
強風のため倒れる石柱があると山12あるバス停の支社は  
このことだ。風、女の多いからたてていう清川島なら  
ではなことだ。  
12市各々と約束して三々五々日清川へ出かけたりした。  
12客もどつてきたり、荷物をかかえて不テル12集会するこ  
うの事だ。  
12市場へ行つたり、本屋をまわつたりした。  
12客を見た。飛行機の乗客も多かった。飛行機で日本人男性の  
うち12人全員が清川市12不テル12集まり、  
やけに一度は焼肉をと12と2焼肉を食べられた。  
12日は午後二時12雨び木テル12集合するこ  
うだった。そして空港から午後五時12飛行機で日本人男性の  
うち12人男性はナル12観又ナル12